

研究ノート

中国語“连……都” 焦点構文と日本語「さえ／も」の対照研究  
—作用域の比較から—

Compare and Contrast of Chinese “Lian...Dou” Focus Structure and Japanese “Sae/mo”

— Comparison in Scope —

胡 亜敏 (Yamin HU)

筑波大学人文社会科学部 博士後期課程

本研究は生成統語論の観点から中国語“连……都” 焦点構文と日本語「さえ／も」の対照分析を試みたものである。中国語では一般的に目的語が文頭の位置に現れる際は主題を担っていると見なされているため (Huang, Li and Li 2009)、“连” は目的語を伴って文頭に生起する際には主題と分析されることがある (Shyu 1995, 2014)。対して、日本語ではそれと等価の意味を表す「さえ」や「も」は主題位置への出現は決して容認されない。一方、かき混ぜ規則が適用可能な日本語は、語順が比較的自由のため、「さえ」「も」が目的語を伴って文頭に生起できるが、形態的な主題マーカー「は」とは共起できない。つまり、日本語の「さえ」「も」は焦点を与える要素であり、主題にならないことを示している。

この相違点に対して、本論文では、先行研究の分析に基づき、“连……都” 焦点構文において“连” は焦点マーカーの機能を果たさないため、主題位置に出現できるとの議論が展開される。さらに、焦点マーカーとして機能するのはむしろ“都” のほうであることを、“都” には日本語の「さえ」と「も」の両方の性質を併せ持っているとの分析が両言語の作用域の比較に基づいて提示される：1) “连 NP” が単文の文中か文頭に生起する場合、および“连 NP” が複文の文頭に生起し、“都” が後続文の従属節内に現れる場合、“都” は「さえ」の性質を持ち、VP 全体を焦点化する；2) “连 NP” が複文の文頭に生起し、“都” が後続文の主節内に現れる場合、“都” は「も」の性質と並行し、主語を含む vP を焦点化する。以上の議論からの帰結として、“连……都” 構文において主に機能を果たす要素は“都” であることを説明し、“连 NP” 句が主題位置に生起できるという情報構造的ステータスと統語位置の矛盾を解消することができると示される。

In this study, I attempted a contrastive analysis of the Chinese “lian...dou” focus structure and the Japanese “sae/mo” focus structure from the viewpoint of generative syntactic theory. In Chinese, when an object appears at the beginning of the sentence, it will generally become a topic (Huang and Li and Li 2009). Thus, when “lian” and an object appear together at the beginning of a sentence, they are sometimes analyzed as the topic (Shyu 1995, 2014). By contrast, in Japanese, where the scrambling principle can be applied, the word order is relatively free; thus, even “sae” and “mo” can be placed at the sentence initial with an object, but they cannot co-occur with the morphological topic marker “wa.” In other words, in Japanese, “sae” and “mo” are focus elements but not topics.

In this paper, based on other studies’ analysis, I suggest that the “lian...dou” focus structure “lian” does not perform the function of the focus marker, and explain this difference. Furthermore, the analysis of “dou” demonstrates that this focus marker has the characteristics of both “sae” and “mo” in Japanese. It is presented based on the comparison of the scope: 1) when “lian NP” occurs at the beginning or in the internal part of a simple sentence, and when “lian NP” appears at the beginning of a compound sentence, “dou” appears in the subordinate clause of the following sentence, and the “dou” is parallel to the “sae” and focuses on the whole VP; and 2) when “lian NP” appears at the beginning of a compound sentence, and “dou” appears in the main clause of the following sentence, the “dou” is parallel to the “mo” and focuses on the vP containing the subject. On the basis of aforementioned discussion, the inconsistency can be resolved

between the syntactic position and the informational status that the “lian NP” can be placed in the topic position.

キーワード：焦点構文 日中対照 作用域 統語論 主題

**Keywords:** Focus Structure, Contrastive Analysis, Scope, Syntax, Topic

## 1. はじめに

中国語の“连……都”焦点構文は、“连”と“都”2つの要素の組み合わせにより、ある対象を強調する機能を持つ。

- (1) 他 连 这本书 都 没 看过。  
 彼 LIAN この本 DOU ない 読む-EXP  
 「彼はこの本さえ( / も) 読んだことがない。」

(1) において、“这本书”(「この本」)は目的語として、“连”を伴い、主語と動詞の間に現れている。SOV 語順が中国語における焦点構文であるという Huang たちの分析に従い (Huang, Li and Li 2009)、同様の語順となっているこの構文も焦点構文ということができ、(1)では「この本」を強調し、「(他の本に関しては言うまでもなく、) この本も読んだことがない」という解釈となる。

日本語では次のように「さえ」(=(2a))や「も」(=(2b))を用いることで同じ意味を表すことができる。

- (2) a. 彼はこの本 さえ 読んだこと がない。  
 b. 彼はこの本 も 読んだこと がない。

また、中国語の場合、(3)のように目的語が“连”をとともに文頭に生起することができる。

- (3) [连 这本书], 他 都 没 看过。  
 LIAN この本 彼 DOU ない 読む-EXP  
 「この本さえ、彼は読んだことがない。」

Huang, Li and Li (2009)によると、中国語において OSV 語順は基本的に主題構文に相当すると言及されている。そのため、(3)における“连+目的語”(以下、“连 NP”を呼ぶことにする)句は主題として解釈されると考えられる。しかしながら、一般的に、“连”は日本語の「さえ / も」と同じように、焦点マーカーと見なされているため (Tsai 1994; Gao 1994; Badan 2007; Tsao 1989; 何元建 2011など)、主題位置に現れることが不可能なはずである。それは、語用論的な観点から見ると、旧情報としての主題と新情報を表す焦点は対立の関係であり、1つの要素は同時に主題と焦点を担うことができないためである。したがって、“连 NP”句が主題になる分析と、“连”は焦点マーカーである分析は矛盾してしまう。この矛盾は形態的なマーカーを持つ日本語からはっきり見える。

- (4) a. この本さえ、彼は読んだことがない。  
 b. この本も、彼は読んだことがない。  
 (5) a.\* この本さえは、彼は読んだことがない。  
 b.\* この本もは、彼は読んだことがない。

日本語の場合はかき混ぜ規則 (Scrambling) が適用し、語順の変化が中国語より自由であるため、(4 a,b)における「この本さえ」と「この本も」は必ず主題要素になるわけではない。この場合も (2)

と同様な解釈が得られる。しかしながら、(5a,b)のように焦点マーカーとしての「さえ/も」は主題マーカーの「は」と共起する場合、つまり、形態上から「この本さえ/この本も」に明確な「主題」機能を付与すると非文になる。

したがって、上述の矛盾に対して、Shyu (1995, 2014) では、“连 NP” が文頭に生起する場合は2種類に分類している。一つは、(6a)のように、“连……都”構文が複文で、“都”が複文の主節に生起する場合、文頭の“连 NP”句が主題になる。一方で、(6b)のように、“都”が複文の埋め込み文内に生起する場合、“连 NP”句が焦点のままである。

- (6) a. 连 玛丽 张三 都 认为 [CP 李四 不喜欢]。  
LIAN メアリ 張三 DOU 思う 李四 好きではない  
「メアリのことさえ、李四が好きではないと張三も思っている。」  
b. 连 玛丽 张三 认为 [CP 李四 都 不喜欢]。  
LIAN メアリ 張三 思う 李四 DOU 好きではない  
「メアリのことさえ、李四も好きではないと張三が思っている。」

Shyu (1995, 2014) では統語分析を通して、(6b)のように、“连 NP”句に焦点が与えられるとしても、“连”は焦点マーカーではないと主張した。確かにShyuにより、焦点マーカーと主題位置の矛盾は解決されたが、では、“连”は焦点マーカーでなければ、“连……都”構文において焦点はどのように与えられるのかについては言及していない。また、“连”は意味的に極めて日本語の「さえ」に似ているが、“连”が焦点マーカーではないのだとしたら、日本語の「さえ/も」構文との共通点をどのように捉えるかという問題が出てくる。

上述の背景のもとで、本論文では、先行研究の分析を踏まえ中国語の“连……都”焦点構文において、焦点機能を果たすのは“都”であることを示し、さらに、“都”は同時に日本語の「さえ」と「も」の作用域の特徴を持っていることを主張する。

## 2. 先行研究と問題提起

前節では、これまでの研究で、中国語の“连……都”焦点構文における“连”が焦点マーカーであるかどうかについて二つの異なる立場があることを言及した。本節では、具体的にその二つの立場を概観し、先行研究において解明されていない問題を提示する。

### (1) “连”を焦点マーカーとして捉える立場

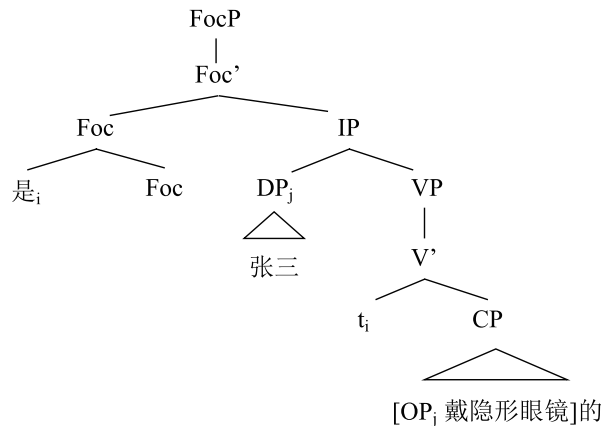
“连”は一般的に焦点マーカーとして捉えられている (Tsai 1994; Gao 1994; Badan 2007; Tsao 1989; 何元建 2011など)。何元建 (2011) では、焦点構文である“是……的”における“是”そのものは焦点付与機能を持たず、VP内の要素を焦点句の指定部 (Specifier) に移動することによって焦点を与えるのだと指摘している。例え (7a) の焦点構文は (7b) から派生されたものである。

- (7) a. 是 张三 戴 隐形眼镜 的。  
COP 張三 つける コンタクトレンズ の  
「コンタクトレンズをつけているのは張三だ。」  
b. 张三 是 戴 隐形眼镜 的。  
張三 COP つける コンタクトレンズ の  
「張三はコンタクトレンズをつけている (人である)。」

(何元建2011: 392)

統語的派生は (8) で示す。

(8)

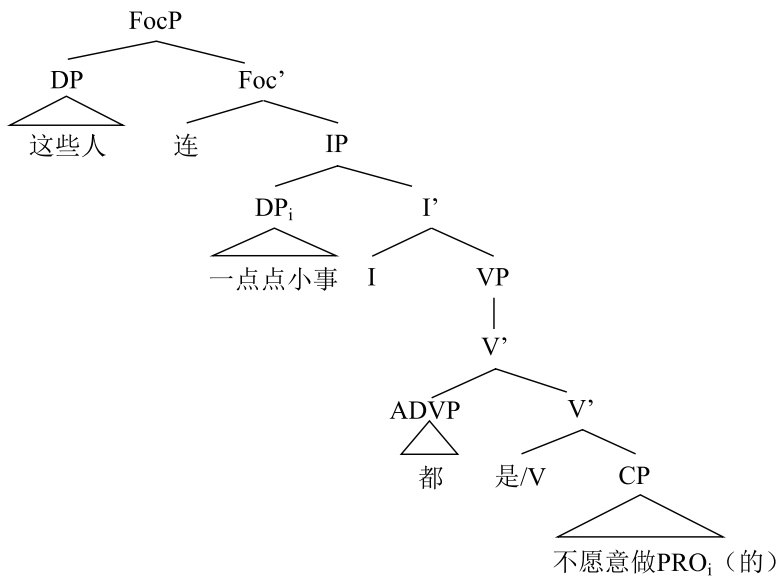


図（1）（7a）の統語構造

（何元建2011: 392）

（8）が示しているのは、“是”がFocPの指定部に移動し、ゼロ焦点詞と併合することで焦点の機能を持つということである。一方で、（9）のような“连……都”焦点構文の場合、“连”そのものが焦点主要部となっており、“一点点小事（ちょっとした仕事）”に焦点を与えるのだと何氏によって指摘されている。統語的派生は（9b）で示す。

- （9） a. 这些人 连 一点点小事 都 是 不愿意做 的。  
 这些人 LIAN ちょっとした仕事 DOU COP したくないやる DE  
 「これらの人は、ちょっとした仕事さえやりたがらない。」  
 b.



図（2）（9a）の統語構造

（何元建2011: 407）

（9b）に示すように、“连”は移動によって焦点機能を果たすのではなく、元から焦点主要部に占

めているため、“连”自身は焦点マーカーであると分析される。

## (2) “连”を焦点マーカーとして捉えない立場

続いては“连”を焦点マーカーとして捉えない先行研究を概観する。Shyu (1995, 2014)や刘・徐 (1998)では“连……都”を焦点構文として見なす一方で、“连”自体は焦点マーカーとして扱わない分析を提案している。

特に、最近の研究である Shyu (2014) では、“连 NP”句は生起位置と派生方法によって、異なる機能を担うと指摘している。たとえば、(10a)のように“连”が文頭に生起し“都”が従属節にある場合や、(10b)のように“连”が文中に生起する場合は、“连 NP”句は移動によって派生され、全体が焦点になる。一方で、(11)のように、“连”は文頭に生起するが、“都”が主節にある場合、“连 NP”は基底生成で文頭に生起しており主題として解釈される（以下、焦点を太字、主題を下線で表記する）と主張している。

### (10) “连 NP” 焦点：

- a. 连 玛丽 张三 认为 [CP 李四 都 不喜欢]。 ((6b) 再掲)  
LIAN メアリ 张三 思う 李四 DOU 好きではない  
b. 张三 认为 [CP 李四 连 玛丽 都 不喜欢]。  
张三 思う 李四 LIAN メアリ DOU 好きではない  
「張三は李四がメアリさえ好きではないと思っている。」

### (11) “连 NP” 主題：

- 连 玛丽 张三 都 认为 [CP 李四 不喜欢]。 ((6a) 再掲)  
LIAN メアリ 张三 DOU 思う 李四 好きではない  
「メアリさえ、張三が李四は好きではないと思っている。」

それぞれの派生については (12) のように示されている。

- (12) a. 连 -DP<sub>i</sub> Subj... [CP Subj *t*<sub>i</sub> 都 V *t*<sub>i</sub>] (= (10a,b))  
b. 连 -DP<sub>i</sub> Subj 都 -V... [CP Subj V *e*<sub>i</sub>] (=11) (Shyu 2014: 117)

(12a) で示すように、“连 NP”句は移動によって生成され、文中に現れる際には痕跡 *t*<sub>i</sub> までで止まる。一方、(12b) では、“都”が主節にあり、文頭の“连 NP”句は基底生成であることを示している。“连 NP”句が文頭に基底生成する根拠を説明するために、Shyu (2014) では (13) のような事実を挙げている。

- (13) a. 连 玛丽<sub>i</sub> 张三 都 [不 送 给 她<sub>i</sub> 书]。  
LIAN メアリ 张三 DOU ない 贈る あげる 彼女 本  
直訳：「メアリさえ、張三は本を彼女に贈らない。」  
= 「張三はメアリさえ（にも）本を贈らない。」  
b.\* 张三 连 玛丽<sub>i</sub> 都 不 送 给 她<sub>i</sub> 书。  
张三 LIAN メアリ DOU ない 贈る あげる 彼女 本  
(14) a. 连 李四<sub>i</sub> 张三 都 不 看 [他/\**t*<sub>i</sub> 的 书]。  
LIAN 李四 张三 DOU ない 読む 彼 の 本  
直訳：「李四さえ、張三が彼の本を読まない。」  
= 「張三は李四の本さえ読まない。」  
b. 连 玛丽<sub>i</sub>, 张三 都 讨厌 [NP [CP *e*<sub>j</sub> 夸奖 她 *i*/\**t*<sub>i</sub> 的] 人 *j*]。  
LIAN メアリ 张三 DOU 嫌い 褒める 彼女 の 人  
直訳：「メアリさえ、張三は彼女を褒める人も嫌いだ。」  
= 「張三はメア리를褒める人さえ嫌いだ。」

(Shyu 2014: 117)

通常の“连……都”焦点構文は(10)で示したように、“连”が文頭にも文中にも生起できる。しかし、(13a)と(13b)のように、再帰代名詞(“她”(彼女))が出現する場合、それと同一指示を持つ“玛丽”(メアリ)は文頭に生起することは可能であるが、文中に生起することはできない。また、(14a)と(14b)に示すように、複合名詞句の中から要素を取り出すことはできないという島の制約に基づき、再述代名詞の出現は容認される一方で、痕跡のままでは非文となっている。

### (3) 問題提起

本論文は Shyu の分析に沿って、“连”は焦点マーカーではないという立場を取った上で、さらなる解明すべき問題を考察する。

本論文で Shyu の分析を支持する理由は主に以下の2点である。まず、“连……都”構文では、“连”は省略できる一方で、“都”は必須要素である(Paris 1979)。(2)で示したように、日本語の「さえ」や「も」は両方とも焦点マーカーであり、それぞれ単独で用いることができるのに対して、“都”は(15a)のように“连”を省略して単独で「予想外」の意味を保つことができるが、(15b)のように“都”が省略されると非文になる。

- (15) a. 他 这本书 都 没 看过。  
       彼 この本 DOU ない 読む-EXP<sup>2)</sup>  
       「彼はこの本さえ読んだことない。」  
       b.\*他 连 这本书 没 看过。  
       彼 LIAN この本 ない 読む-EXP

もう1つの理由として、(16)の主題構文においては、主題要素は弱交差効果(Weak Crossover; WCO)を見せないことである(Rizzi 1997, Shyu 1995, Badan and Del Gobbo 2010)。弱交差というのは、痕跡をc統御していない代名詞を先行詞が飛び越える現象である。Benincà and Poletto (2004)では、焦点マーカーは演算子の一種として、LF部門で上昇して作用域を決定するため、WCO効果に影響されることを指摘している。そのため、(17)のように“连”が文中に生起して焦点になる場合はWCOが観察される(Benincà and Poletto 2004, Badan and Del Gobbo 2010)。

- (16) [这条 可爱的 狗]<sub>i</sub>, [它<sub>i</sub> 的 主人] 会 喜欢 <sub>t<sub>0</sub></sub>。  
       この 可愛い 犬 それ の 飼い主 だろう 好き  
       「この可愛い犬<sub>i</sub>は、飼い主が(その犬<sub>i</sub>のことが)好きだろう。」

(Badan and Del Gobbo 2010: 6)

- (17)\*我 连 妹妹<sub>i</sub> 都 [把 她<sub>i</sub> 喜欢的 玩具]<sub>j</sub> 抢走 了 <sub>t<sub>0</sub></sub>。  
       私 LIAN 妹 DOU BA 彼女 好きな おもちゃ 奪う PERF  
       =「私は妹が好きなおもちゃさえ奪った。」

(Badan and Del Gobbo 2010: 7)

以上の現象に基づいて、Shyuは(18)のように“连 NP”句が文頭に現れ、“都”が主節にある場合はWCO効果を起こさないため、“连”は焦点マーカーではないと指摘している。

- (18) 连 张三<sub>i</sub>, [NP 批评 他<sub>i</sub> 的 那个女人] 都 认为 [CP 玛丽 喜欢 (他<sub>i</sub>)]  
       LIAN 張三 批判する 彼の あの女 DOU 思う メアリ 好き 彼  
       「張三<sub>i</sub>さえ、彼<sub>i</sub>を批判する女は、メアリが彼<sub>i</sub>のことが好きだと思っている。」

(Shyu 1995: 135)



上述の理由で、本論文では“连……都”焦点構文における“连”は焦点マーカーではないという Shyu の分析を支持する。しかし、先行研究には言及されていない問題点があり、言語対照の観点からの理論分析も欠けている。

まず一つ目の問題点として、Shyu の分析に従えば、“连”が焦点マーカーではないならば、“连……都”構文において、どのようなメカニズムで焦点を付与するのかということが挙げられる。例えば、(10a,b) のように、“连 NP” 句全体が焦点と見なされる場合、(9b) の構造を用いて“连”を焦点機能主要部とする分析を支持する一方で、(16) ~ (18) の事実は“连”が焦点機能主要部ではないことを証明している。この矛盾を解決するために、连……都”焦点構文における焦点付与メカニズムを明らかにしなければならない。

そして第二の問題点として、仮に“连”を焦点マーカーとしない Shyu の分析を採用したとしても、日本語で“连”に対応する「さえ」、そして類似する「も」が主題マーカーと共に起できない焦点マーカーであるという点との並行性を支持しようとする限り矛盾が生じる。つまり、ここで“连”は焦点マーカーではないという分析を支持するならば、日本語の「さえ/も」との共通性をどのように捉えるのかという問題が出てくる。次節からは、上記の二つの問題点に対して具体的な分析を行う。

### 3. 焦点付与メカニズム

前節では、“连……都”焦点構文に関する先行研究の二つの分析を述べ、本論文が取る立場と残された問題を明示した。本節では、この構文において“都”は統語上の機能主要部であることを示し、具体的な統語派生を提案する。

#### (1) “都”は焦点マーカーである

(2-3) 節の (15) に示したように、“连”は省略できるのに対して、“都”は省略できない。また、統語的性質に関する観察から、“连 NP” 句がある環境では主題になる、別の環境では焦点であるという性質は“连”、“都”の生起位置に左右されることがわかる。この事実は、“连”自体を一貫した焦点マーカーと見ることはできないことの証左である。そこで、“连……都”焦点構文において、“都”こそが焦点マーカーであると提案する。

したがって、本論文では、“都”による焦点付与メカニズムとして、(19b) の構造を提案する。

- (19) a. 他 (连) 这本书 都 没 看过。  
 彼 LIAN この本 DOU ない 読む-EXP  
 「彼はこの本さえ読んだことがない。」

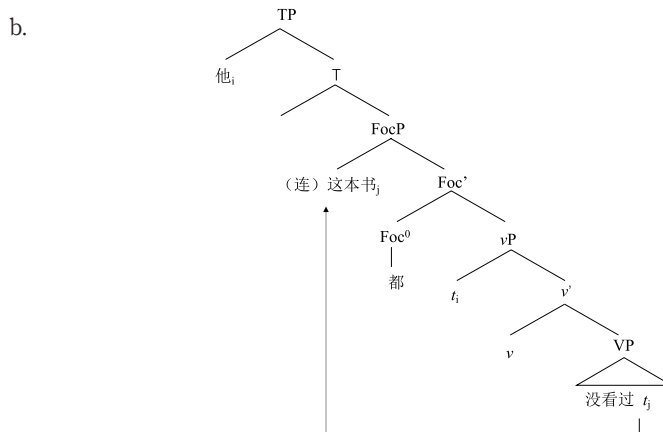


図 (3) (19a) の統語構造

(19a) は、「彼はこの本さえ読んだことがない、他の本は当然読んでいない」という意味を表している。そのため、焦点が与えられている部分は「この本」と考えられる。したがって、(19b) の構造では、“都” は焦点機能主要部 (Foc (us) 主要部) として、焦点をもらうために VP の中から FocP の指定部へ移動した“(連) 这本书”に焦点を付与することを示している。ただし、(19b) の構造からは、“都” が焦点を付与するのは、その直前に現れる要素であると考えられるかもしれない。しかし実際には、“都” は常に直前の要素に焦点を与えているのではないことを、(20) のように“(連) NP” が主題位置に出現する場合から説明することができる。

- (20) a. 连 这本书, 我 都 知道 他 没 看过。  
 LIAN この本 私 DOU 知る 彼 ない 読む-EXP  
 「私は彼がこの本を読んだことがないことさえ知っている。」  
 b.\* 连 这本书, 我 都 知道 他 没 看过, 但 王五 不知道。  
 LIAN この本 私 DOU 知る 彼 ない 読む-EXP 王五 知らない  
 「私は彼がこの本を読んだことがないことさえ知っているが、王五は知らない。」

(20a) は、“連” が文頭に生起し、“都” が複文の主節に生起する場合、つまり“連 NP” が主題になる場合である。このとき、(20b) のように後続に主節主語 (“我”) と比較関係を表すような文が加わると非文となる。これは、(20a) の文において“都” の直前の要素である“我” には焦点がかかっていないことを示している。つまり、(19a) と (20a) の間では“都” の直前要素に焦点がかかるか否かという点で焦点範囲の違いが観察されることになる。それでは、この両者の焦点範囲の差はどのように捉えるべきだろうか。この問題を解明するために、本研究は“連……都” 焦点構文と並行的な意味を持つ日本語の「さえ」「も」に対する作用域の分析を援用して説明を試みる。

## (2) 日本語の「さえ」と「も」

まず、「さえ」の作用域について、青柳 (2006) によれば、「さえ」が取れる作用域は目的語を含む VP 全体であると指摘されている (Kuroda 1965)。例えば、(21) の文脈に対しての後続文は、「酒を飲む」以外の行為を要求する。

- (21) 昨日のコンパで、まだ未成年の太郎は酒を飲んだばかりか…  
 a. タバコを 吸いさえ した。  
 b. タバコさえ 吸った。

(青柳 2006: 122)

(21a) の「さえ」は動詞の後ろにあるため、「酒を飲む」以外に「タバコを吸う」という VP 全体を焦点とすることができる。対して、(21b) では、「さえ」は「タバコ」に付いており、特定の文脈がなければ、「タバコ以外の何かを吸った」ことを含意するが、この文脈において、「タバコを吸うこと以外の何らかの行為をした」ことを含意することも可能である。そのため、「さえ」は VP 全体を焦点に取ることができると考えられる (青柳 2006)。

「さえ」の作用域の構造は、(22) のように示されている。



(22)

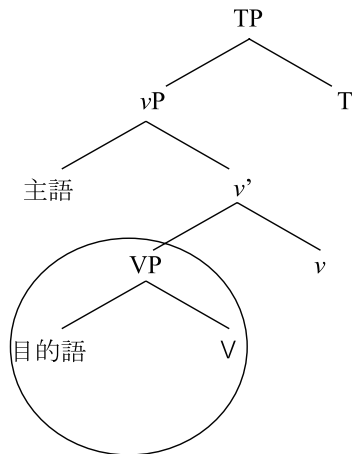


図 (4) 「さえ」の作用域

(青柳 2006: 132)

次に「も」に関しては、文脈がなければ直前に来る要素を焦点にとるが、(23) のように、特定の文脈がある場合、「も」はどの位置に置かれても文全体を焦点に取りうる。つまり、a, b, c 文のいずれもが「太郎がピアノを弾く」以外の何らか出来事が起こった」という意味を表す。ゆえに、「も」は「vP」全体の作用域を取り、その作用域は主語を含む文全体であるため、広い焦点を取ると説明されている。

- (23) 昨日のパーティーでは、花子がダンスを踊っただけではなく、  
a. 太郎が ピアノを 弾きも した。  
b. 太郎が ピアノも 弾いた。  
c. 太郎も ピアノを 弾いた。

(青柳 2006: 123)

「も」の作用域の統語構造は、(24) のように示されている。「も」の場合は、主語を含めて vP 全体に焦点を取ることができる。

(24)

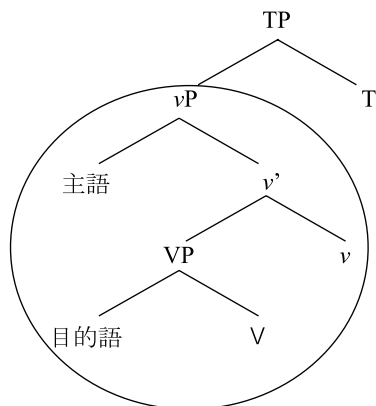


図 (5) 「も」の作用域

(青柳 2006: 132)

つまり、「さえ」と「も」は同じくとりたて詞として焦点付与の機能を果たすが、統語部門において、それぞれが取る作用域の領域が異なっている。

## (3) “都” の作用域

本節では、青柳（2006）の分析を踏まえ、中国語の“都”の焦点範囲は「さえ」もしくは「も」のどちらに当てはまるかを検討してみる。まず、“连 NP” が主題になる場合、つまり (25) の構造を有する場合を考える。

(25) 连-DP<sub>i</sub> Subj 都-V... [CP Subj V e<sub>i</sub>] ((12b) 再掲)

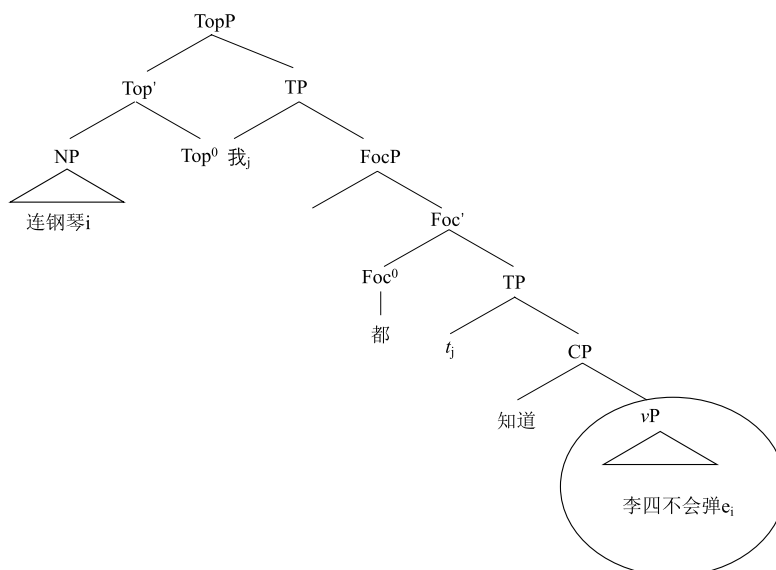
(26) 连 钢琴 我 都 知道 李四 不会 弹。  
 LIAN ピアノ 私 DOU 知る 李四 できない 弾く  
 「私は李四がピアノさえ弾けないことを知っている。」

(26) の文を単独でみると、「私は李四がピアノを弾けないだけでなく、他の楽器もできないことを知っている」という意味を表し、“钢琴”（「ピアノ」）を焦点にとるが、文脈を加えると、より広い作用域をとることが可能になる。

(27) 连 钢琴 我 都 知道 李四 不会 弹,  
 LIAN ピアノ 私 DOU 知る 李四 できない 弾く  
 更别说 我 还 知道 王五 不会 拉 小提琴 了。  
 言うまでもなく 私 さらに 知る 王五 できない 弾く バイオリン PERF  
 「私は李四がピアノを弾けないことさえ知っているの、王五がバイオリンを弾けないことももちろん知っている。」

この文では、「私は李四がピアノを弾けないこと以外に、他の人のことも知っている」という意味を表している。つまり、(27) において、“都” が取れる作用域はその直前の“我”ではないものの、“连钢琴” だけでもない。それは「も」と同じように、動詞句の主語を含む vP 全体をとっていると考えられる。従って、その構造を (28) のように示すことができる。

(28)



図（6）(27) の統語構造

次に、“连 NP” が焦点になる場合、つまり (29) の構造を有する場合について検討する。

- (29) 连 -DP<sub>i</sub> Subj... [CP Subj  $t_i$  都 V  $t_i$ ] ((12a) 再掲)
- (30) a. 连 钢琴, 我 知道 李四 都 没 弹。  
LIAN ピアノ 私 知る 李四 DOU ない 弾く  
「私は李四がピアノさえ弾かなかったことを知っている。」
- b. 连 钢琴, 我 知道 李四 都 没 弹,  
LIAN ピアノ 私 知る 李四 DOU ない 弾く  
更别说 跳 舞 了。  
言うまでもない 踊る ダンス PERF  
「私は李四がピアノを弾かなかったことさえ知っているので、踊らなかったことももちろん知っている。」
- c.\* 连 钢琴, 我 知道 李四 都 没 弹,  
LIAN ピアノ 私 知る 李四 DOU ない 弾く  
更别说 王五 跳 舞 了。  
言うまでもない王五 踊る ダンス PERF  
「\* 私は李四がピアノを弾かなかったことさえ知っているので、王五が踊らなかったことももちろん知っている。」

(30a) では、“钢琴”（「ピアノ」）を焦点にとり、「私は李四がピアノを弾かなかった以外に、他の楽器も弾かなかったことを知っている」という意味を表している。さらに文脈を加えると、(30b) のように「私は李四がピアノを弾かなかった以外に、他のこともしなかったことを知っている」という解釈が可能になる。しかし、(30c) が非文となることから、動詞句の主語“李四”までは焦点が取れないことが分かる。

上述の分析に基づき、(29) の構造を持つ文の場合における“都”の作用域は日本語の「さえ」と同じように VP までしかとれないと考えられる。従って、その構造を (31) のように示すことができる。

- (31) a. 李四 连 钢琴 都 不会 弹。  
李四 LIAN ピアノ DOU できない 弾く
- b. 连 钢琴, 李四 都 不会 弹。  
LIAN ピアノ 李四 DOU できない 弾く  
「李四はピアノさえ弾けない。」

(32)

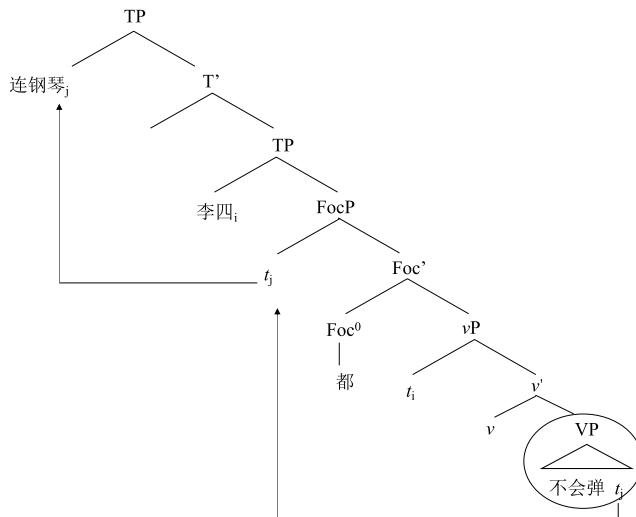


図 (7) (31) の統語構造

(32) の構造は、基本的には“連 NP” 句が文中に生起する場合と一致する。ただし、語用的な強調を求める際に、“連 NP” 句が“都”によって焦点を付与された後に、さらに文頭へと移動している。

上述の分析を通して、まず、焦点マーカーと見なされている“連”が主題位置に生起できるという矛盾を解決することができる。つまり、“連……都”焦点構文において、焦点マーカーの機能を果たしているのは“都”であり、“連”は焦点マーカーとしては機能していないため、“連”が主題位置に出現することができる。そして、“連”と“都”の生起位置によって“都”が取れる焦点範囲が異なることを示し、青柳(2006)による作用域分析に基づき、“都”が日本語の「さえ」「も」と同じ性質を持つことを解明した。従来の先行研究では、中国語の“連……都”焦点構文において、“連”が焦点マーカーと見なされている一方で、“連 NP” 句が主題位置に生起できるという事実は認識されており、その情報構造的ステータスと統語位置との矛盾が問題であった。本研究では、作用域と統語位置の相関性が、意味的に対応する日本語の「さえ」「も」と並行的であるということを論拠に“都”が焦点マーカーであることを主張した。ここから、“連 NP” 句が焦点としても主題としても解釈され得ることを説明することが可能であり、上述の矛盾を解消したと言える。

#### 4. “連” 主題の語用論的機能

前節までは“連……都”焦点構文において、焦点マーカーの機能を持つのは“都”であると分析した。では、“連”はこの構文のなかにどのような役割を果たしているのかという問題が出てくる。本節では、“連”の語用論的な機能に関して説明を試みる。語用論の観点から見ると、主題は「既知・旧情報」を表すが、必ずしも前文脈で出現した情報ではなく、話し手と聞き手両方が持っている背景知識でも「既知・旧情報」と捉えられる。この点においては主題と焦点の境界が曖昧であり、この曖昧性を捉えるために「対照主題」という概念が提案されている(Kuno 1973; Büring 2003など)。中国語に対しても、「対照主題」に関する分析が見られる。例えば、Shyu (2014) によって、(33A) における“儿子”(「息子」)は対照主題として指摘されている。

- (33) Q: 你 有 孩子 吗?  
 あなた いる 子供 Q  
 「あなたは子供がいますか?」  
 A: 儿子 我 有, (可是 女儿 没有)  
 息子 私 いる しかし 娘 いない  
 「息子は(私は)いますが、(娘はいません。)」

(Shyu 2014: 116)

(33A) における“儿子”には顕在的な情報が提示されていないが、(33Q) で提示されている“孩子”(「子供」)に関連する情報として、「既知・旧情報」に見なすことが可能である。しかし、この場合他の何らかの情報と対比しなければならない。つまり、(33A) では、表面的には“儿子我有”だけで回答しているとしても、話者が“女儿没有”(「娘はいません」)という対比する情報を伝達しようとすることを含意している。また、Shyu (2014) ではこのような対照主題に関して、通常の主題や関連性主題と区別する特徴を以下のように指摘している：

- (34) a. 不定的な要素が容認される  
 b. 常に他の対照要素が並列されている(潜在のあるいは顕在的)  
 c. 必ずしも排他的なわけではない  
 d. より高い位置にある要約主題に先行される

(Shyu 2014: 115)

従って、“连……都” 焦点構文において文頭の主題位置に基底生成される“连 NP” は、対照主題に属すと考えられる。

- (35) 连 一 本 书, 我 都 知 道 他 没 看。  
LIAN 一 冊 本 私 DOU 知 る 彼 不 能 読 む  
直訳:「一冊の本さえ、私は彼が読んでいないことを知っている。」  
=「私は彼が一冊の本さえ読んでないことを知っている。」

- (36) \*一 本 书, 我 看 了。  
一 冊 本 私 読 む - PERF  
「\*一冊の本は、私は読んだ。」  
Cf. (这本) 书, 我 看 了。  
この本 私 読 む - PERF  
「(この) 本は、私は読んだ。」

“一本书”（「一冊の本」）は不定名詞であり、(35) のように“连 NP” 主題にはなり得るが、(36) のように通常の主題にはならない。そして、(35) の文は「一冊の本でも読んでいないのに、他のことももちろんしていない」という対比的な意味を含意している。また、(35) を含む全ての“连……都” 構文は、使用状況としては一般的に単独で使われるのではなく、常にある話題に関して何らかの情報を強調するため、(37) のように前文脈に“他今天什么都没做”（「彼は今日何もしなかった」）といった要約主題が存在する。

- (37) 他 今 天 什 么 也 没 做, 连 一 本 书 我 都 知 道 他 没 看,  
彼 今 日 何 も 不 能 做 的 LIAN 一 冊 本 私 DOU 知 る 彼 不 能 読 む  
別 说 写 读 后 感 了  
言 う ま で も 不 能 写 感 想 文 PERF  
「彼は今日何もしなかった。私は彼が一冊の本さえ読んでいないことを知っているから、感想文を書いたわけがない。」

上記の分析に従い、主題位置に基底生成された“连”は通常の主題から対照的主题を区別する語用論的な機能を持つと考えられる。

## 5. 結論

本論文では、中国語の“连……都” 焦点構文において“连”が主題位置に出現できるのに対して、日本語の「さえ/も」は主題になり得ないという違いから比較研究を行った。

その結果、“都”は焦点を与える機能を持ち、以下に示すように、生起環境の違いによって取り得る焦点の作用域が異なることを明らかにした。

- 1) “都”がVPを焦点化する（狭い焦点）
  - a. “连 NP”が単文の文中か文頭にある。
  - b. “都”は複文の従属節内にあり、“连 NP”が文頭に生起する。
- 2) “都”が文全体を焦点化する（広い焦点）  
“都”が複文の主節にあり、“连 NP”が文頭に生起する。

まとめると、中国語の“连……都” 焦点構文において、“连”は焦点マーカーと見なされているが、“连 NP”句が主題位置に生起できるという事実も認識されており、その情報構造的ステータスと統語位置との矛盾が問題であった。本研究では、作用域と統語位置の相関性が、意味的に対応する日本語の「さえ」「も」と並行的であるということを論拠に“都”が焦点マーカーであると主張した。した

がって、“连 NP” 句自体が焦点としても主題としても解釈され得ることを説明し、上述の矛盾を解消することができた。さらに、“连 NP” 主題は「対照主題」という語用論的な機能を持つことを論じた。

## 参考文献

- 青柳宏2006.『日本語の助詞と機能範疇』東京：ひつじ書房
- 高見健一・久野暉 2006.『日本語機能的構文研究』東京：大修館書店
- 曹逢甫 .1994.< 再论话题和“连……都 / 也”结构 >.《功能主义和汉语语法》北京语言学院出版社
- 何元建 .2011.《现代汉语生成语法》北京大学出版社
- 徐烈炯, 刘丹青 .1998.《话题的结构与功能》上海教育出版社
- Badan, L. and F. del Gobbo. 2010. On the syntax of topic and focus in Chinese. In: *Mapping the left periphery*, Benincà, P. and Munaro, N. (eds.), 63-90. Oxford: Oxford University Press.
- Benincà, P. and C. Poletto. 2004. Topic, focus and V2: defining the CP sublayers. In: *The structure of CP and IP: the cartography of syntactic structures*, Rizzi, L.(ed.), 52-75. Oxford: Oxford University Press.
- Büring, D. 2003. On D-trees, beans, and B-accent. *Linguistics and Philosophy* 26: 511-545.
- Kuno. S. 1973. *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Paris, M. C. 1979. Some aspects of the syntax and semantics of the "lián...ye/dou" construction in Mandarin. *Cahiers de linguistique - Asie orientale*, 5 : 47-70
- Paris, M. C. 1994. Position syntaxique et valeur discursive: le cas de même en chinois. *Cahiers de linguistique Asie orientale* 23 (1-2) : 241-253.
- Paris, M. C. 1998. Focus Operators and Types of Predication in Mandarin. *Cahiers de linguistique - Asie orientale* 27 (2) : 139- 159.
- Paul, W. and J. Whitman. 2017. Topic prominence. *The Wiley Blackwell companion to syntax*, Second Edition. Everaert, M. and van Riemsdijk, H. (eds.), 1 -31. MA: Malden.
- Rizzi, L. 1997. The fine structure of the left periphery. In: *Elements of Grammar: handbook of generative syntax*, Haegeman, L. (ed.), 281-337. Dordrecht: Kluwe.
- Shyu, S. I. 1995. *The syntax of focus and topic in Mandarin Chinese*. Ph.D. dissertation, University of Southern California.
- Shyu, S. I. 2004. (A)symmetries between Mandarin Chinese lián...dou and shenzhi. *Journal of Chinese Linguistics* 32: 81-128.
- Shyu, S. I. 2014. Topic and Focus. In: *The handbook of Chinese linguistics*. Huang, C. T. J, Li, Y. H. A. and Simpson, A. (eds.), 100-125. Hoboken: John Wiley and Sons.
- Tsai, W. T. D.1994. *On economizing A-bar dependencies*. Ph.D. dissertation, MIT.
- Tsao, F. 1987. On the so-called ‘verb-copying’ construction in Chinese. *Journal of Chinese Language Teachers Association* 22: 13-44.
- Tsao, F. 1989. Comparison in Chinese: a topic-comment approach. *Tsing Hua Journal of Chinese Studies* 19: 151-189.
- Xu, L. J. and T. Langendoen. 1985. Topic structures in Chinese. *Language* 61 (1) : 1 -27.
- Xu, L. J. 1986. Free empty category. *Linguistic Inquiry* 17: 75-94